

## 巻頭言

下向井 龍彦

春には刊行する予定だった第二号。年も暮れようかというこの季節になつてようやく完成にこぎつけた。多忙ななか、はやくに原稿を寄せてくれていた卒業生諸君には申し訳ないことをした。一教官室のゼミ生だけで研究誌を刊行するのは、思ひのほか難儀なことだ。

創刊号は、多方面から好感をもつて迎えられ、多くの励ましや期待の声をいただいた。私もうれしかったし、それ以上に論文を載せた諸君、次に載せる諸君が喜んでくれた。『史学雑誌』の「回顧と展望」で、大迫論文が、「著名な文永・建治相論期を主たる検討対象とするが、河野通明説を前提に」と紹介され、吉村論文が、「平安末期の改姓や『譜第』の虚構性などの論点を提示する」と紹介されたことは、彼らにとって大きな励みになつたし、後に続く諸君には、自分たちも、という目標ができた点で、ありがたかつた。また各地の研究者から、「卒業論文抄」ではかわいそうだ、という意見をいくつかいただいた。その言葉に甘えて、本号からは「論説」とさせていただけことにする。

さて教員養成のカリキュラム改革で、教科内容の必修単位が激減し、かわつて心理・教育など教職関係の単位が増えることになるらしい。私のような奈良平安時代史を研究することしか能のない男も、社会科学の授業を担当することになるかもしれない。私も大変だが、素人から授業を受けることになる学生こそいい迷惑だ。これも、いじめ・不登校・学級崩壊などへの対応なのだろうが、子ども達の学校での生活の大半は、授業である。授業を充実させることこそ、学校教育のさまざまな問題を解決する捷徑なのではなからうか。充実した授業をするためには、深い知識と幅広い教養が必要であるが、それは椅子を温めるだけの受け身の講義で何百単位取るうが身につくものではない。自ら問題をみつけだし、資料を集め、各種の辞書・索引を縦横に使いこなしながら徹底的

に調べ、考えて、自分なりの答を導き出そうとする積極的な知的態度こそ、深い知識、幅広い教養の源泉であろう。教科内容の単位半減とか、あるいは卒論の廃止など、もつてのほかの議論であると、私は思う。

教育学部系の学生定員五〇〇〇人削減に対応するため、さまざまな学部改組案が出ては消え出ては消え、結局、二年後に教育学部との合併、というかたちで落ちついた。旧制文理大・高等師範・師範の序列の亡霊さえ見えかくれする賛成・反対の議論に、「紅旗征戎吾が事にあらず」と言い切つた藤原定家の心境、といきたいところだが、なかなか超然ともしておれない。教員採用試験の合格者数は、私のゼミでも確実に減少している。今年、女子ばかり七人いる卒論ゼミ生は、来年度は男女一人ずつになる。聞くところによると、日本史で卒論を書く採用試験の勉強ができないから敬遠するのだとも（実際はそんなことはないのだが）。専門科目の授業が減り、卒論指導がなくなつたら、いよいよこの学部での私の存在価値はなくなつてしまう。

しかし、今度の合併劇。ひよつとして私の閉塞感に光明をもたらしてくれるかもしれない。これまで文学部で専門の講義を受けてきた高校教員をめざす社会科学教育の学生が、私の授業を聞き、私のもとで卒論を書くことになる。私の願ひは、できるだけ多くの学生が私の歴史のとらえ方、私の学説に共鳴（ないしは反発）してくれ、将来、彼らが行う授業に活かしてくれることである。博士課程後期を担当することにでもなれば、研究者を育てることも夢ではない。教官のなかには負担増だという不満の声も聞こえるが、私としてはのぞむところだ。

もつとも、この合併は厳しいリストラの嵐への対応なのであるから、いま書いたことは楽天的にすぎよう。事態はもつと深刻なのであろう。やはり、「紅旗征戎吾が事にあらず」。この『史人』をよりどころに、いままでどおり、歴史を学ぶことの喜びを学生に伝えていくだけだ。

第三号の原稿もぼつぼつ届き始めた。

一九九八年一月一日